

沖縄における学校行事の一考察

—学校生活における「ゆとり」と「私」「公」観念—

川 井 勇

要 約

戦前の学校は、厳しく統制され、現代に比べ著しく「ゆとり」のない無味乾燥な世界だったのだろうか。沖縄では戦前の史料のほとんどが戦争によって焼失した。本稿では、僅かに残存する児童文集と回想から、明治以降、集団意識涵養のために利用されてきた運動会や遠足、修学旅行、さらに学校生活の様子について考察した。また、1941年子どもたちの学校生活にとってどのような転機となったかについても言及した。

キーワード：学校行事、運動会、少年団

1. はじめに

よく戦前の教育は軍国主義で悪い教育、戦後の教育は自由な教育、そのようにイメージで語られることが少なからずあるように思われる。確かに明治中期以降、学校は国家主義的に統制され、いわゆる皇民化教育が進められてきたわけだが、果たして学校は一分のスキもなく統制された窮屈な世界だったのだろうか。戦前の教育の弁護をするつもりは毛頭ないが、単純な善悪のイメージだけで語られてしまうと、現代の学校の息苦しさを見落としてしまうのではないか。

本稿では主に那覇を舞台として、子どもたちの作品や回想を手がかりとして、教科以外の活動に対する子どもたちの実感、教育の中の「ゆとり」、そしてその「ゆとり」が失われていく過程と「公」を大事とする観念の関わりについて考察する。なお、本稿は『那覇市教育史通史編』（那覇市教育委員会、2000年）に掲載した拙稿をもとに構成されていることをお断りしておきたい。

2. 学校における心躍る体験

戦前の教育は良かったとか、正しかったとかいうことでは必ずしもなく、子どもたちは皇民化教育の最中にあっても、結構学校生活を楽しんでしまっていたらしい。もちろん、学校外の世界の遊びの楽しさには比べるべくもないが、ここで当時の教育の全てを詳細に描き出すことは出来ないで、子どもたちが特に楽しいと感じることの多かった教育活動、運動会と遠足、旅行について触れてみたいと思う。

まず、1931年（昭和6）の松山尋常小学校の文集から運動会を迎えた日の子どもたちの気持ちを垣間見てみよう。

私はとこの上へおきあがってつぶやいた。今日はたしかに十一月五日なのだまにまった運動会がもう来たのかと思うとゐても立ってもおられない。私ははっとふとんをはねのけて空をすぐ見た。なんというすばらしい天気だろう。おかってではお母さんが朝御飯のおしたくであちへいたりこちへ来たりしてゐられる。時計もいそがしさうに八時をうった。朝飯をいただいてからかはずの夜まわり市歌ダンスまりとふうせんの三つのだんすをおけい

こした。お昼を十一時にいただいてお母さんと学校へ来た。学校の門には秋空高くかといたがくをたてゝあって、運動場にははたが風にふかれてひらひらとまっていた。その下では生徒たちがおもしろそうにかけまわっていた⁽¹⁾。

待ちに待った日を迎え、まず空を見て天気を確認めた子どもの気持ち、そして、弾むような気持ちで学校の運動場へ向かった様子が文章から伝わってくる。こんなに楽しみにしていた運動会ではどのような種目が展開されたのだろうか。那覇市教育史編纂室が行った昭和10年代に「那覇」で小学校生活を送られた方々に対する聞き取り⁽²⁾によると、ある程度共通した種目が浮き上がってくる。遊戯、ダンス、徒競走、リレー、騎馬戦、棒倒し、障害物競走、二人三脚など、現代と共通する種目も少なくない。しかし、現代と較べて特徴的なことは、地域、とりわけ青年団の積極的な参加があり、生徒及び青年団による部落対抗競技が大変盛んであったことだろう。運動会の形態は、大道国民学校のように第一高等女学校と合同で行った特異なケースもあるが、会場は別として個別の学校単位の運動会が基本で、旧首里市及び旧那覇市はその他に、或いは隔年で全体で連合運動会が開かれた。

「わあ!」「やあ!」「しっかり!」

泊側の観衆の方からは万雷の如き歓呼の声が起こった。それは那覇市連合大運動会第三十三回目の那覇市八校の一年生の責任徒歩の時であった。秋晴れの下に勇ましく優勝を争う選手の様子は実に勇ましいものだ。とうとう第一着で勝ち得た我が泊がははそれこそ総立ちの有様であった。

つぎは二年生の番だ。僕等は心の中で泊校の優勝いのるばかりだ⁽³⁾。

文中の「責任徒歩」とはリレーのことだろうと推測されるが、学校対抗の熱狂した様子が伝わってくる。聞き取りによれば、首里第三尋常高等小学校では、「一年生から六年生まで、授業終了後にバトンタッチの稽古を一ヶ月前から実行。夕方近くまで練習があったので、学校の予算でご飯が出ました。夕食をとって、学校代表をかけて再び練習⁽⁴⁾」したほどの熱の入れようだったという。このような学校対抗も含めた集団間競争が戦前の運動会の大きな特徴といつてよいだろう。

そもそも運動会の歴史を明治にさかのぼると、高等教育学校の例は別として、初等教育においては連合運動会として始まった。それは、明治中期までは体操が必修ではなかったために学校に体操場(運動場)が備わっていなかったり、義務教育就学状況が低く、各学校での開催が難しかったことによるが、集団訓練と集団間競争を通して集団意識を高め、更にそれを愛国心(国家への所属意識)の高揚に結びつけていくという政策意図のもとで盛んに行われるようになった。明治34年(1901)5月21日の琉球新報には次のような記事が見られる。

会場は予定通り渦原にて入口には張抜き擬造石門をたて右手に「大運動会場」と大書したる大標札を掛け国旗を交叉し当日の正賓たる北条侍従席の前に大国旗を樹てたり・・・見物の人多く流石の広き渦原も隙間なきほど人を以て充されたるのみならず若狭町松尾の如き少しく高き所は全く人の山を築き見ゆる限りは人にてありき・・・各校の生徒は午前十一時頃より其校旗を真先にたて軍歌を歌いつつ勇ましく会場に繰込み・・・北条侍従臨場するや師範学校の喇叭手君が代を吹奏し次に生徒全体同じく君が代一曲を奏したり⁽⁵⁾・・・

侍従の来島を記念しての運動会であるが、集団間競争の熱狂が地域住民をも巻き込んだ形で展

開かれていった様子が見えてくる。このようなケースの他にも、「教育勅語下賜記念」「戦勝祝賀」などの名目で連合運動会は開催されており、どのような時に集団間競争の熱狂が演出されたのかがよくわかる。やがて就学率の向上と運動場の整備に伴い学校ごとに行われるようになっていった。

しかし、そのような政策意図が背景にありながらも、子どもたちの楽しい経験、楽しい思い出としてあり続けたのはなぜだろうか。それは単調な日常生活に対するきわめて刺激的な「非日常」的体験であったり、教育勅語や国定教科書を象徴とする真面目で厳格な統制的時間と空間からの身体解放を可能（もちろん完全な意味での解放ではないが）とする「すき間」足り得たからではないか。運動会は、擬制ながらも集団対抗意識を巧みに利用した新たな「祭祀」的要素（お祭り）と、よく工夫された娯楽、遊戯的要素（お楽しみ）を持っていたのであろう。明治以降、ムラ共同体の祭祀は官製の学校行事に吸収され、入れ替わっていく。そして、太平洋戦争が始まると、ルーズベルトやチャーチルの人形を竹槍で突く競技種目（楚辺国民学校）や、少年団訓練としてグライダーを飛ばす種目（松山国民学校）など⁶⁾、軍国主義的な種目が増え、統制された鍛錬の場へと変わっていった。

集団訓練として奨励され、学校文化として定着した遠足や修学旅行も基本的には運動会と同様の意味を持つと思われる。ただ「那覇」の場合、修学旅行は太平洋戦争開戦の翌年からほとんどの学校で中止となり、実施に関して多少運動会とは事情が異なる。

僕たちはさる二十二日の土曜日に嘉手納に遠足にいきました。あすはえんそくといふ夜はたいへんうれしかったのでねむられませんでした。・・・

七時半に那覇えきから嘉手納へすゝむ。時に十二回もえきにとまった。まもなく嘉手納えきについた。またそこでもれつをつくって農林学校の庭を見物してゆくと先生がくわばた君その島はくはばたといふんだとをっしゃってみんなを笑はせました。それからとぐちのはまにいきました。・・・また汽車にのってなはえきについたときちょうど三時半でした⁷⁾。

7時半に那覇を出発し、3時半に戻った嘉手納への遠足の様子である。自動車や飛行機で簡単に旅行へ行くこともテレビで日常を越えた世界を垣間見することも容易ではなかった子どもたちにとって、遠足は少なからぬ冒険であったに違いない。明日の遠足を考えると眠れなくなるほどに。

聞き取りによると行き先は、旧首里市の学校は、浦添城址、浦添ようどれ、小湾、鏡水の灯台、識名の馬場、与那原（海水浴）など、旧真和志村の学校は、天久崎樋川、上間バンタ、小湾、ガジャンピラの气象台、首里城、首里桃原農園、知花の桃山、与那原など、旧那覇市の学校は、奥武山公園、小湾、天久崎樋川、上間バンタ、豊見城嘉数バンタ、瀬長島、識名園、砂辺、中城、糸満、中部の桃山、桑江、普天間、气象台など、そして旧小禄村の学校は、豊見城嘉数バンタ、波の上、首里城、崎原灯台、瀬長島⁸⁾などである。徒歩或いは汽車で出かけたが、いずれも日帰り可能な場所であった。それにしても、多くの学校が遠足で向かった小湾や中部（知花）の桃山など、残念ながら私たちは今その素晴らしさを実感することができない。かつて子どもたちが弁当を開き、遊んだ土地には、広大な米軍基地が広がっている。

旅行或いは修学旅行は大仕掛けの遠足とあってよいだろうか、他校での一、二泊の宿泊と長距離の徒歩が加わる。たとえば首里第二尋常高等小学校の卒業生が記憶する島尻旅行は、「首里から与那原・佐敷まで歩いて行き、玉城小学校で一泊し、港川へ。そして、高嶺小学校で二泊し、糸満に遠足に来ている下級生と合流して汽車で帰る⁹⁾」というコースであったという。また、松山国民学校の場合は、嘉手納まで汽車、そこから徒歩で仲泊を通過して石川の伊波小学校に1泊、

2日目は泡瀬の美東小をめざしそこで1泊(?)、更に中城を通過して大山から汽車で那覇へ帰るというコースであった。ともに現代からすればまさしく苦行のような旅ではあるが、「遠くてとにかく疲れましたが、読谷から見た初めての伊江島タッチューや、坂(現在の330号線?)を上りつめたときに見えた海(金武湾など)にとっても感動しました。中城まで来たときには、安里盛市先生が護佐丸の話をしてくださったとの証言⁽¹⁰⁾の中に、集団訓練、鍛錬という側面の一方で、普段と異なる感動や学習もあり、楽しい思い出として心に刻まれる秘密が物語られているように思う。

しかし、国民学校は昭和17年頃から、2泊3日ほどの修学旅行を実施する余裕すらも失っていくのである。

3. 教育の中の「ゆとり」

戦後、それも現代からすると、戦前は統制された不自由な時代というイメージがある。もちろん明治以降の皇民化教育、満州事変以降軍国主義的傾向が強められていく中での教育の不自由さということはある。しかし、それでは現代の教育は不自由ではないのかということ、いささか疑問である。個々の教師にとって、授業があるにも関わらず、子どもたちを連れて校外へ出るということは、結構勇気が必要とすることである。

今日はまれに日本晴の好天気なので一同は坂名城先生にみちびかれて裏の野原に散歩にでかけた。

途中は思ったより暖かく時々松の木かげにやすみながら絵のような、あっさりした風光を眺めたり又は色々な話をしたりしてごく愉快にあるきつづけた。

その中に畠のみぞにころげおちた人がゐる。一人の者が「よそみをするからころがるのだ」といふと「ばか。人がころぶと笑ふなんて」とささやく。

一歩々々歩みつづけてゐる中に一同は小高い所にでた。ひろびろとした那覇市街ははるかに展開された泊港も眼下によこたわって全く一幅の絵である。

やわらかい春風はそよそよと吹いて僕等のはだにあたり松のこずえでしきりに小鳥がちゅうちゅうないてゐる⁽¹¹⁾。

めったにない日本晴だから子どもたちを散歩に連れ出してしまふ。見えるもの、聞こえるものがこちよく感じられ、その気持ちよさを共有したくて学校を飛び出してしまふ。この教師の感性も素晴らしいが、行動の「自由度」にはびっくりしてしまふ。1932年(昭和7)の泊尋常小学校文集『とま里』に掲載された文章だが、まさにファシズムへ向かおうとする時でありながら、教育の中にこのような「ゆとり」或いは「ゆるやかさ」があり得たということだろう。

また、1930年(昭和5)の垣花尋常小学校文集『ゆりかご』第3号には「四時間目をおくる」と題した次のような文章が見られる。

時間がなり出し先生はにこにこしながら今日は午後一時より平和館で活動があります。それをきいた私はよろこんだ。もうそれからはやく時間がなればいゝがと思うことばかりである⁽¹²⁾。

「活動」とは活動写真、つまり映画のことである。子どもたちは映画が好きである。この時代

は既に学校はそれを奨励する社会ではなかったはずであるが、現実には学校で連れて行くということもあったようである。1930年代前半の「ゆとり」は、1937年（昭和12）日中戦争突入、1941年（昭和16）太平洋戦争開戦と時代が進む中で、次第に失われていき、学校はきわめて「自由度」の制限された空間へと変わっていく。しかしそのような状況にもかかわらず、「六年のころは、宿直室で真栄城初子先生と泊まり込みで受験勉強をした思い出があります。・・・私は昭和一九年に卒業して一高女へ入学・・・当時は映画には行ってはいけないという雰囲気があったのですが、真栄城初子先生が旭館に一度連れていっていただきました⁽¹³⁾」という証言すらあり、「生徒」と「教師」の触れ合いや関係性は必ずしも一面的ではなかったように思われる。

だが、学校が「自由度」の乏しい世界になっていったということは紛れもない事実である。何が要因かといえば、いうまでもなく「戦争」で、「戦争の足音」が聞こえてくるに従って、学校生活の「ゆとり」や「ゆるやかさ」は失われていった。戦争により国家の余裕が失われていくに従って、そのしわ寄せは教育や子どもに向かい、子どもたちは否応なく「公」のことを考えざるを得なくなり、そして「公」のために生きることを強く求められた。1940年の那覇尋常小学校文集『上乃山』に収められた作文の一つ見てみよう。

とつぜん郵便やさんが走ってきて電報といひましたので、兄さんがうけとって見てみましたが、どうしたのか兄さんは電報を持ったまゝおとうさんの所に行きました。一寸すると、兄さんとおとうさんが出てこられました。おとうさんはすぐ一味ていに電話をかけました。兄さんは走って兄さんのたいへんよい友達をよんで来ました。まもなく一味ていからごちそうがはこばれてきました。・・・兄さんのお友達が兄さんにむかって「お目出とう」といひました。兄さんは笑ひながら嬉しそうなかほつきをして居ました⁽¹⁴⁾。

兄さんが出征する。「戦争の足音」はこのように子どもたちにも聞き取れるように近づいてきた。「おめでとう」と言い、「うれしい」と受け取る感情が、「国家のため」に生きることを求められて育ち、そのようにしか表現し得なかった時代を物語っている。戦死者の遺骨の出迎えがなされているすぐそばで、出征兵士の見送りが行われた。「六年生のころ、各学校から校旗を持って那覇港へ出征兵士の見送りに行ったことが印象深く残っています。何度も行きました。・・・週一回の閲兵分列や行進の練習がいやで、また、校内のどこで遊んでも鐘が鳴ると式台に向かって不動の姿勢で立つ一点鐘も好きではありませんでした。女子も手旗信号の練習を屋上で随分やりました⁽¹⁵⁾」とするのは、昭和13年泊尋常高等小学校入学者の証言である。「何度も行きました」という言葉にどのような気持ちが込められているのか。是非読みとっておきたいものである。広く行われた「一点鐘」こそ、学校での軍国主義的統制を象徴するといえるのではないだろうか。鐘が鳴ったら、どこで何をしていても、式台に向かって不動の姿勢をとることである。鐘で式台に向かって不動の姿勢をとるということは、つまり、いかなる時も上官の命令を守る人間になれということを象徴しているのである。この時点で学校は、「子どものための学校」ではなくなっていた。

4. 少国民と呼ばれるようになって

子どもたちが日常的に、それも非常に軍国主義的に少国民と呼ばれるようになったのはいつ頃からだろうか。そして、少国民という語にはどのような意味が込められたのだろうか。時期に関

しては、「少国民」にこだわりながら作家活動を続ける山中恒が、「ごく一般的に、日常的に使われるようになったのは、1941年12月8日勃発の大東亜戦争（太平洋戦争）以降のことである⁽¹⁶⁾」と指摘しているが、ほぼ1941年以降と考えてよいだろう。契機として次の三つの出来事をあげることができる。第一に、1941年（昭和16）1月16日の大日本青少年団の結成、第二に同年4月からスタートした国民学校、第三が同年12月8日の太平洋戦争の勃発である。

大日本青少年団は、大日本青年団、大日本聯合女子青年団、大日本少年団聯盟、帝国少年団協會が統合されたものだが、国家の要請を受けての結成であった。大日本青少年団結成式における橋田邦彦文部大臣の演説からも国家の要請の強さがうかがわれる。

抑々大日本青少年団を結成された所以のものは、我が国青少年の皇国民としての実力を一層強固にし、……青少年の全生活を教養訓練として具現せしめんとするの見地より全国青少年を一元的組織の下に結集して国家の要請に即応する統制ある訓練を施し、以て青少年活動をして真に高度国防国家体制の建設に力強く協力せしめんとするものである。……其の組織機構並に其の運営の實際に当たっては自由主義的、民主主義的なるものを排除して、天皇に帰一し奉ることに於て実現する皇国の全一的なる体制の一面として、其の体制を確立すべく最善の努力を払わねばならない⁽¹⁷⁾。

新少年団と旧少年団の大きな違いは学校教育との不離一体性にある。対象、指導者、目標のいずれにおいても不離一体である。まず、団への加入は任意ではなく、国民学校3年以上の児童生徒が自動的に団員として組織された（青年学校生徒は青年団へ）。そして、指導者は従来のような地域住民ではなく教員にとって変わった。小学校は国民学校へ変身を遂げ、「皇国民の錬成」が明確に教育目的として掲げられることにより今まで以上に営門に直結する皇民化教育の場たることが求められたが、少年団の指導目的も国民学校と全く同じであるとされ、学校教育と連携し補強する役割を担わされた。全大日本青少年団の団長は文部大臣、地方団長は地方長官、青年学校長、国民学校長が単位団長に。青年団、少年団それぞれの入団式は1941年から全国一斉に4月29日（昭和天皇の誕生日）に、学校における天長節（現代では天皇誕生日という）の儀式の後に行われ⁽¹⁸⁾、原則的に全員が組み込まれていった。子どもたちは学校の内と外とを問わず、全生活的に天皇へ帰一する「皇国民」として生きること、或いは「正しい皇国民」になることが求められた。太平洋戦争の勃発、そしてその後の戦況悪化とともに、そのような要請は強められて行くが、その時代に「子ども」は「少国民」とされた。

国民学校と少年団の不離一体性とは、学校の中に団体訓練的な「少年団」的なものを拡大し、少年団の中に「学校」的要素を拡大していくということでもある。1942年（昭和17）に出版された『少年団精講』によれば、校内における少年団的なもの（少年団訓練につながるもの）としては、登校団、朝礼、学習に伴う訓育（学級委員活動など）、国民学校施行規則にある毎週3時間内外の行事や団体訓練等、そして運動会、遠足、学芸会等があげられている⁽¹⁹⁾。ちなみに登校団とは集団登校のことであり、大日本青少年団の活動の一環として始められたもので、班単位で登校する集団登校のことである。遅刻防止のためではなく、団体訓練のための集団登校である。朝礼もやはり訓練的観点から国民学校に変わって一層強化された。新たに結成された青少年団との「不離一体性」との考え方ゆえに、学校を中心とする子どもたちの生活の中に国家主義的、軍国主義的訓練が急速に広がっていったのである。

ところで、子どもたちはよく行進させられた。国民学校ではこれまでの体操に変わって「体練科」（3年生以上では授業時間数は2倍になった）が登場したが、その時間においても、朝礼に

おいても、更には集団登校においても、子どもたちは隊列を組み、「正しい」歩き方をすることが求められた。「正しい」歩き方は「正常歩」と呼ばれたが、皇国民の錬成を象徴する訓練であった。1941年に出版された大谷武一著『正常歩』は一冊をもってその何たるかを説明した本だが、はしがきでは、「正常歩の訓練は、一つは一億一心の「行」でもあるのである。非常時突破の鍵が、挙国一致にありとすれば、二人以上で歩く場合には、必ず一億一心を歩に体现しなければならぬ。斯くてこそ、はじめて国難突破の気構が出来たと云えるのである⁽²⁰⁾」と説いている。それに沿わぬ歩き方は「自由主義的、個人主義的」として排され、子どもたちはがんばって歩調を合わせ「正しい」歩き方を歩いた。いろいろな人がいて、いろいろな生き方があるはずなのに、「正しい」歩き方と「正しくない」歩き方があるということは何とも不思議で、乱暴きわまりない考え方だが、子どもたちには「正しい」皇国民であることが強く求められたのである。

国民学校になってからは、鍛錬会と称し奥武山、嘉数バンタ、气象台、小湾等へ行軍のようなことをさせられた。また毎月一日の興亜奉公日に代わり毎月八日の日を大詔奉戴日とされた。そのころその日には字区単位で学童が早朝登校前に波の上神社に集団で参拝し戦勝を祈願した⁽²¹⁾。

刻々と学校内外の子どもたち生活が戦争モードになっていく様子がうかがわれる。

戦時色が凡ゆる面に浸透し始めました。校名が小学校から国民学校に変わりました。校門には、我々六年生から二名づつ一時間交替で、銃に代わる団銃という棒を持って門衛として立つことになりました⁽²²⁾。

正常歩で集団登校した少年団のグループは門衛へ敬礼し、到着の報告をし、更にみんなで奉安殿に最敬礼をして、少国民たちの学校生活が始まった。まるで兵隊のようだ。少国民には、偏狭な伝統文化がひたすらに説かれ、銃後の戦士として徹底的に鍛錬され、彼らは私生活ではごく当たり前のように兵隊ごっこに興じた。そして、この時代ほど「私」を捨て「公」（国家や国家の戦争に対してではあったが）への奉仕活動が求められた時代はなかったのではないか。当時の先生はよく体罰をふるい、怖かったなどという回想を見かけるが、なぜ教師はますます体罰をふるうようになっていったのだろうか。それは、小学校が明確に「営門」に通じる「錬成」の場になっていったということと、教師が学校だけでなく、少年団の指導者でもあるとされたことと関係するだろう。教師は、子どもたちの全生活を通して「皇国民」への「錬成」をする教師と位置づけられた。

大日本青少年団指導者中央錬成講習会の資料は、指導者の態度を次のように説いている。

指導者は先ず何よりも自らが皇国民たる信念に燃えることである。そこに始めて真剣みがありかくて団員を自らに同化せしめ得るのである。立てば日本精神を説き、坐れば国体の精華を口にしても、自らの平素の行が之に反すればそれは指導者たるの資格を失った人である。この種の訓練は、単に末梢的な理論や技術ではなく、そのもてる信念であり、気迫である⁽²³⁾。

教師は、明治以降一貫して児童生徒の模範足ることが求められてきたのではあるが、学校の内外で皇国民としての信念に燃え、気迫あふれる模範であることを求められたとき、それによく呼応した。教師の「皇国民錬成」の熱意と気迫は、しばしば子どもたちに対する鉄拳制裁になるこ

ともあったが、「少国民」に対して体罰がふるわれるとき、まさしく教師は軍隊の内務班で新兵を鉄拳で鍛えあげる「古参兵」であった。聞き取りによれば、「戦争たけなわの五・六年のころは穴掘り作業の日々と（水がたまっている）壕に入る練習ばかりが印象に残り、登校も団体で、閲兵行進の練習などは全体の動きはとてもきれいでしたが、みんなまったく兵隊さんみたいでした。真珠湾攻撃以来、毎月八日はなんとかの集まりといって、運動場で校長先生の訓話を聞きましたが、国のために死ぬということでした⁽²⁴⁾。少国民に求められた究極目標は、「自分を減して国のために生きること」、つまり「滅私奉公」であるが、それは「国のために死ぬ」ということなのであった。

5. まとめとして

「今日は天気がいいから裏山へ行こう」などと言って、授業をやめて、子どもたちを校外へ散歩に連れ出すような余裕は、まず今日の学校ではなかなかない。「管理」という点からいっても、戦前の教員に比べて現代の教員の方が緩やかであるなどとは必ずしもいえない。そして仕事量の多さも比べ物にならない。そのような中で「公」を大事とする考え方の導入が求められはじめている。

体育的、あるいは旅行的行事を子どもたちは大好きだ。しかし、かつて子どもたちに対して、「私」中心の意識を捨て「公」への奉仕が、学校の内外で徹底して求められ、行事が「公」意識を練成する集団訓練になりきってしまったとき、学校は「ゆとり」を失い、「出会い」の場ではなくなってしまったのだった。

註

- (1) 松山尋常小学校『フタバ』3号、1931年、42、43頁
- (2) 那覇市教育史編さん室『聞き取り調査記録書 那覇市の戦前の学校』1999年、参照
- (3) 泊尋常小学校『とま里』1932年、91、92頁
- (4) 那覇市教育史編さん室『聞き取り調査記録書 那覇市の戦前の学校』15頁
- (5) 『琉球新報』明治34年5月21日
- (6) 那覇市教育史編さん室『聞き取り調査記録書 那覇市の戦前の学校』参照
- (7) 松山尋常小学校『フタバ』3号、1931年、25頁。
- (8) 那覇市教育史編さん室『聞き取り調査記録書 那覇市の戦前の学校』参照
- (9) 那覇市教育史編さん室『聞き取り調査記録書 那覇市の戦前の学校』13頁
- (10) 那覇市教育史編さん室『聞き取り調査記録書 那覇市の戦前の学校』60頁
- (11) 泊尋常小学校『とま里』1932年、83頁
- (12) 垣花尋常小学校児童文集『ゆりかご』第3号、1930年、34頁
- (13) 那覇市教育史編さん室『聞き取り調査記録書 那覇市の戦前の学校』34頁
- (14) 那覇尋常小学校『上乃山』第19号、1940年、60、61頁
- (15) 那覇市教育史編さん室『聞き取り調査記録書 那覇市の戦前の学校』52頁
- (16) 山中恒『少国民はどう作られたか』筑摩書房、1986年、6頁
- (17) 日本青年教師団編『青少年団指導要義』弘学社、1941年、4頁、8頁
- (18) 大日本青少年団副団長から地方団長宛の昭和16年4月2日の通知「青少年団入団日設定

並ニ入団式全国一斉挙行ニ関スル件」(団組発1号)による。

- (19) 熊谷辰治郎・松永健哉『少年団精講』第一出版協会、1942年、81～93頁
- (20) 大谷武一『正常歩』目黒書店、1941年、4、5頁
- (21) 『遙かなり激動の少年期・楚邊國民學校一九四〇～一九四五』87、88頁
- (22) 『那覇市垣花尋常小学校・国民学校同窓会誌・追憶』1986年、304頁
- (23) 日本青年教師団編『青少年団指導要義』81頁
- (24) 那覇市教育史編さん室『聞き取り調査記録書 那覇市の戦前の学校』56頁